

夜回り

山田先生

西陵商ラグビー部元監督

20



▼山田耕二(やまた・こうじ) 名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商(現西陵)監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県赤富士市で老人ホームの理事長を務める。

走り続けた「軽量商」選手たちに「ありがとう」

「入ってくれ!」。期待と不安が交錯し、緊張感に包まれる中、私は逆転勝利を確信していた。前年度の大会で日川高に1点差で敗れてから、生徒たちに口酸っぱく言ってきた。「ゴールキック1つで勝敗が入れ替わる」ともある。1点差で勝つか負けるかの差は天国と地獄だぞ」と。

特にキッカーの後藤には「目をつぶって蹴っても入られるようになれ。ボールの位置が分かるくらい神経を研ぎ澄ませるんだぞ」と言い聞かせた。毎日、全体練習が終わってからも、何十本とゴールキックの練習をさせてきた。最後のキックの位置は、

ゴールほぼ正面。入らないわけがない、と安心しきっていた。後藤は力いっぱいボールを蹴った。すると、ボールはポストぎりぎりへ。そしてポストをかすめた。内側をかすめて、ゴールを通過した。逆転優勝。選手も応援団も、抱き合ったり、拳を突き上げた。歓喜に沸き返った。

私も感動で胸がいっぱいだった。涙で顔をグシャグシャにしながら生徒たちと抱き合い、「ありがとう、ありがとう」と言い続けた。

「軽量商」。小柄なチームを冷やかされ続けながらも、生徒たちと頂点を目指して1日も休まず走り続けた。長い長い日々が実を結び、頂点からの景色を見せてくれた生徒たちには、本当に感謝している。あの感動は、今も忘れない。

決勝戦から来年で20周年になる。「あの感動をもつ一度」ということで、当時の西軍メンバーを集めての記念試合が決まった。来年12月4日。まだまだ先のことだが、また新しい楽しみを与えてくれる。

近鉄特急に乗り、名古屋

花園の決勝、ロスタイム。小川のトライで24-25と1点差に迫った。時間的

に最後のワンプレー。スタンドは総立ちで大盛り上がり。ゴールキックが入れば全視線が注がれた。

①西陵商-啓光学園 劇的な逆転で優勝、西陵商フイティーンに胴上げされる山田監督 ②安定したキックで日本一に導いた後藤和彦 1997年1月7日、花園ラグビー場で



祈りを乗せたゴール1点差の劇的逆転

(おわり)

駅に帰着したのはその日の夜9時すぎ。改札口は私たちを出迎えようと駆けつけてくれた方々でごった返していた。翌朝も、学校への祝福の電話が鳴りやまなかった。